

令和 6 年 5 月 3 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00561

研究課題名（和文）フェイズと転送領域の研究—照応形束縛と移動の局所性に関する日英語比較から

研究課題名（英文）Phase and Transfer Domains: Implications from the Comparative Syntax of the Locality of Anaphor Binding and Movement

研究代表者

斎藤 衛 (Saito, Mamoru)

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：70186964

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最も重要な成果は、フェイズと転送領域の新たな定義を提案し、その帰結として、(1) 照応形の束縛領域をより正確に捉え、(2) 制御の移動分析（あるいはコピー形成分析）とフェイズ理論の矛盾を解消して、さらに (3) これまで問題とされてきた使役文における照応形の分布と残留部移動に関する日英語の相違に初めて説明を与えることができたことである。また、密接に関連するテーマとして、日本語wh句の分析についても、成果を得た。これまでに提案された相矛盾する諸分析を統合して、wh句を焦点化された選択関数とする新たな分析を提示し、その分析に基づいてwh句の比較統語論研究を遂行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フェイズと転送領域の理論は、言語における局所性を統一的に捉えようとするものであり、統語理論における最も重要な柱の一つである。本研究は、フェイズと転送領域の新たな定義を提案することにより、理論をより経験的に妥当なものとし、これまで分析されえなかった日英語の相違にも説明を与えた。具体的には、照応形束縛の局所性の検討から、一致に言及する形でフェイズを定義し直す必要を示し、フェイズ理論と制御の分析の矛盾を解消することがその帰結として得られることを指摘した。さらに、フェイズと転送領域の定義の普遍性を維持しつつ、問題としてあった日英語の相違を一致の有無から導く道筋を示した。

研究成果の概要（英文）：The most important proposal of this research project is a new definition of phase and transfer domain. It was shown that the new definition more precisely captures the locality of anaphor binding and also resolves the contradiction between the phase theory and the analysis of control in terms of movement (or copy formation). In addition, it makes it possible to explain some differences between Japanese and English that have resisted an analysis over the years. One difference concerns the distribution of anaphors in causative sentences and another the possible forms of remnant movement. This research project also obtained a significant result with the analysis of wh-phrases in Japanese. The new analysis unifies the previously proposed, mutually incompatible analyses and treats Japanese wh-phrases as focused choice functions. A comparative syntax of wh-phrases was pursued on the basis of this new analysis.

研究分野：言語学

キーワード：フェイズ 転送領域 照応形束縛の局所性 制御の局所性 残留部移動 比較統語論 極小主義アプローチ カートグラフィ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) Chomsky (1981) の LGB 理論では、文法格の付与、名詞句の移動、照応形の束縛等における局所性が明らかにされ、それぞれが文法原理として定式化された。Chomsky (2008) は、CP と v^*P をフェイズとして、派生がフェイズ毎に行われ、フェイズが完成した時点で、その補部が解釈部門に転送されてアクセス不能になるとすることにより、移動と一致 (およびその反映としての文法格の付与) の局所性に統一的な説明を与えることを提案した。

(2) Chomsky (1981) は、照応形はその束縛領域内で先行詞により c 統御されなければならないとしている。Quicoli (2008) などは、この局所性もフェイズと転送の理論により説明することを提案した。ただし、TP の主語に位置する照応形については、その束縛領域が TP に一致があるか否かにより左右されることが知られており、例えば、‘*Mary insisted [CP that [TP herself saw it]]’ と「花子は [CP[TP 自分自身がそれを見た] と] 主張した」は対比をなす。CP を一様にフェイズとし、その補部がアクセス不能になるとする標準的な仮説の下では、この事実を捉えることができない。

(3) Hornstein (1999) は、‘John wants [CP [TP ~~John~~ to go to London]]’ のような制御文を、移動により分析することを提案した。この分析は、概念的に基礎付けられ、多くの経験的問題を解決するが、標準的なフェイズと転送領域の定義とは相容れない。

(4) フェイズと転送の理論は、それまで個別の原理として仮定されていた各種の局所性に説明を与えようとするものであり、その抽象性ゆえに、これまで分析されえなかった現象、特に、日英語において相違が見られる現象を説明する可能性を秘めている。この可能性を追究することが新たな研究課題としてある。

(5) 日本語の wh 句は、「か、も」などの量化小辞とともに解釈される。量化小辞を演算子として wh 句を変項とみなす分析、wh 句を非顕在的に移動する演算子とする分析、wh 句の指示対象を代替集合とする意味分析などが提案されているが、いずれも wh 句の性質の一面を捉えるに留まっており、その局所性を含め、wh 句の性質をより総合的に説明する分析が必要である。

2. 研究の目的

(1) 研究開始当初の背景 (2) で述べたように、照応形束縛の局所性を正確に捉えるためには、CP フェイズが完成した時点で転送される領域を、一致がある場合には補部の TP、一致がない場合には TP の主語を含まないより狭い領域としなければならない。この条件を満たすように、フェイズと転送領域の定義に修正を加える。制御文においては、補部 CP が一致を欠くため、この修正は、フェイズ理論と制御の移動分析の間の矛盾を解消することにもなる。新たに提案するフェイズと転送領域の定義が、照応形束縛と制御の局所性について、より広く、一般的に正しい予測をするかを検証する。

(2) 日英語の相違について、これまで分析されえなかった現象がある。例えば、Kato (2010) が指摘する使役文における照応形の分布の相違がある。日英語の使役文は同じ構造を持つとされているが、「花子が太郎に自分自身を推薦させた」では、「花子」が「自分自身」の先行詞となりうるが、‘*Mary made John recommend herself’ は非文である。日英語の基本的な相違の一つに一致の有無がある。新たに提案するフェイズと転送領域の定義は、一致の有無に言及するものであり、したがって、広く日英語の相違に説明を与えうる。本研究では、この可能性を追究する。

(3) 日本語の wh 句は、Kuroda (1965) が指摘するように、「誰が書いた本もおもしろい」のような例では全称量化文の一部として、「誰がきましたか」のような例では wh 疑問文の一部として解釈される。また、Nishigauchi (1990) は、wh 句と量化小辞の間に、移動に典型的な局所性が課されることを観察している。さらに、「花子は、旅行に行くと言ったが、いつ行くとは言わなかった」のように、wh 句が量化小辞を伴わない例も観察される。これまでに提案された分析を統合しつつ、日本語 wh 句の性質全般を説明しうる分析を追究する。

3. 研究の方法

(1) 照応形束縛と制御の局所性について、先行文献を参考にしつつ、説明すべき一般化を明確にする。その上で、一般化を説明しうるフェイズと転送領域の定義を提案する。さらに、新たな定義の文構造や派生に対する帰結を検討する。例えば、例外的格付与文の補文は、CP ではなく例外的に TP であると仮定されてきたが、研究の目的 (1) に示した形でフェイズと転送領域を定義することができれば、T を含む補文は一様に CP である可能性が生じる。この例を含めて、分析を簡素化する新たな可能性を検討する。

(2) 研究の目的 (2) に示した日英語の相違に加え、両言語間の他の相違についても、より正確に記述し、説明することを試みる。例えば、英語では、‘Fall into the ditch, it (the ball) did’ のように、NP 移動の残留部 VP を前置することが可能であるが、対応する日本語文「*穴に落ちさえ、ボールがした」は非文法的である。このような相違については、幼児が言語獲得時に直接的な証拠を与えられるとは考えにくく、一致の有無などのより単純な相違から導かれるべきものと考えられる。一致の有無に言及するフェイズと転送領域の定義から、説明を与える可能性を追究する。

(3) 日本語 wh 句については、量化小辞を欠く例の分析から開始する。この種の例において、wh 句は焦点として解釈されると思われるが、まず、焦点の理論に鑑みて、この点を確認する。その上で、wh 句が全称量化文や疑問文の一部をなす文についても、wh 句を焦点として解釈を導く分析を提示する。

4. 研究成果

A. フェイズと転送領域に関する研究は研究期間を通して遂行し、得られた成果を論文と研究発表の形で随時公表したが、最終的な成果は、“On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages” (*The Linguistic Review* 41: 59-84, 2024) にまとめた。また、開拓社から刊行予定の著書『生成統語論の成果と課題』では、研究成果をより詳細に紹介している。

(1) Quicoli (2008) の分析を発展させ、照応形束縛の局所性をより正確に捉えるために、フェイズと転送領域の定義を以下のように修正することを提案した。

(i) C および v^* はフェイズ主要部である。加えて、T と V は、それぞれ C と v^* から ϕ 素性を受け継ぐとき、フェイズ主要部としての性質も受け継ぐ。

(ii) 派生においてフェイズが完成した時点で、下位のフェイズが解釈部門に転送される。

この新たな定義は、研究開始当初の背景 (2) で指摘した問題を解決し、さらに、フェイズ理論と制御の移動分析 (あるいは後に Chomsky (2021) が代案として提示した制御のコピー形成分析) との間の矛盾を解消する。

(2) 動詞を選択する要素には、他動詞と非能格動詞を選択する v^* と非対格動詞を選択する v があると

されているが、標準的な理論では、 v^* のみをフェイズ主要部としている。また、T を伴う補文は通常 CP であるが、例外的格付与文と繰り上げ文においては、補文は例外的に TP であると仮定されている。本研究では、(i) と (ii) を採用した場合には、 v^* と v を共にフェイズ主要部とし、T を伴う補文が一樣に CP であるとするのが可能であり、また、一貫性においてより優れたこの分析を支持する経験的証拠が得られること示した。

(3) 使役文における照応形の分布において、日英語に相違が見られることを研究の目的 (2) で紹介した。この相違は、(i), (ii) および日本語が一致を欠くことを仮定した場合には、Quicoli (2008) が提案する照応形の分析により正しく予測される。この日英語の相違の分析は、英語において、抽象的ではあるが、他動詞と目的語の間に一致があることを裏付けるものでもある。

(4) 英語における残留部移動の可否については、Kitahara (2017) が、併合に係る新たな制約として Chomsky (2021) が提案した Minimal Yield に基づく分析を提案している。この分析は、標準的なフェイズと転送領域の定義の下では、‘Fall into the ditch, it (the ball) did’ と「*穴に落ちさえ、ボールがした」の対比に代表される日英語の相違は予測しない。本研究では、(i), (ii) および日本語における一致の欠如を仮定した場合には、この日英語の相違も Kitahara の分析により説明されることを示した。

B. 日本語 wh 句の分析については、成果を、大阪大学、University of Maryland で発表し、“Wh-Phrases as Genuine Focus Operators” と題する論文にまとめた。論文は、*Rich Descriptions and Simple Explanations in Morphosyntax and Language Acquisition* (Luigi Rizzi 教授ジュネーブ大学退職記念論集, Oxford University Press, 印刷中) に収録される。

(1) 量化小辞を伴わない wh 句が焦点として解釈されることを確認した。また、移動に特徴的な局所性を示すことから、文周縁部の焦点位置に非頭在的に移動するという分析を提示した。

(2) 日本語の wh 句が不定名詞句として解釈されるとした Nishigauchi (1990) の洞察を受け継ぎつつ、不定名詞句の解釈を選択関数 $f(D)$ とする Reinhart (1997) の分析を採用して、日本語 wh 句を一樣に焦点化された選択関数として分析することを提案した。焦点の位置にある $f(D)$ は、上位の「か」と共に which $f: f(D)$ と解釈され、上位の「も」と共に all $f: f(D)$ と解釈される。さらに、補文標識「と」の下では、the $f: f(D)$ と解釈されるとして、日本語 wh 句の統一的分析を提案した。この分析は、従来の非頭在的移動分析、変項分析、代替集合分析を統合するものでもある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

- (1) Saito, Mamoru “On the Causative Paradoxes: Derivations and Transfer Domains,” *Nanzan Linguistics* 15, 2020, 25-44. (オープンアクセス, 査読なし)
- (2) 斎藤 衛 「原理群による規則の説明から原理群の説明へーラベル付け理論をめぐって」 *Energeia* 45, 2020, 15-37. (招待論文, 査読なし)
- (3) Saito, Mamoru “Phrase Structure and Movement in Japanese,” *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, 2021, 1-45 (pdf 版, オンライン). (オープンアクセス, 逍遥論文, 査読あり)
DOI: 10.1093/acrefore/9780199384655.013.286
- (4) Saito, Mamoru “On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages,” *The Linguistic Review* 41, 2024, 59-84. (オープンアクセス, 逍遥論文, 査読あり) DOI: 10.1515/tlr-2024-2003

- (5) Saito, Mamoru “Wh-Phrases as Genuine Focus Operators,” *Rich Descriptions and Simple Explanations in Morphosyntax and Language Acquisition* (Oxford University Press), in print. (逍遙論文、査読あり)

[学会発表] (計 8 件)

- (1) 齋藤 衛「転送の単位と言語間変異—移動と束縛における局所性をめぐって」(招待講演), ドイツ文法理論研究会 2019 年春の大会, 2019, 学習院大学.
- (2) Saito, Mamoru “Variation in Transfer Domains and the Presence/Absence of Phi-feature Agreement” (招待講演), The 12th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, 2019, University of Macau. (国際学会)
- (3) Saito, Mamoru “Weak Heads in Labeling: Why J/K-type Scrambling is Allowed” (招待講演), Syracuse/Cornell Workshop on Scrambling, 2021, Cornell University. (オンライン、国際学会)
- (4) Saito, Mamoru “Evidence for Minimal Yield and Form Copy from East Asian Languages” (招待講演), Modern Grammar Society of Korea, 2022, Dongguk University. (オンライン)
- (5) Saito, Mamoru “On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages” (ワークショップ基調講演), GLOW in Asia XIII Online Special, 2022, 香港中文大学. (オンライン、国際学会)
- (6) 齋藤 衛「Theta 規準再考—コピー形成操作とラベル付け理論をふまえて」(特別講演), 日本英語学会第 40 回大会, 2022. (オンライン)
- (7) Saito, Mamoru “In Defense of Covert Wh-movement” (招待講演), MayFest 2023, 2023, University of Maryland. (国際学会)
- (8) Saito, Mamoru “Null Arguments in EA Languages Revisited: Ellipsis or Pronouns” (招待講演), Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL) 17, 2023, National University of Mongolia. (国際学会)

[図書] (計 1 件)

- (1) 齋藤 衛、高橋大厚、瀧田健介、高橋真彦、村杉恵子(編)『日本語研究から生成文法理論へ』開拓社, 2020, 295pp. [執筆部分: 第 1 章「弱主要部と言語類型論—日本語の文法的特質をめぐって—」, 2-18.]

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Wh-Phrases as Genuine Focus Operators (校正済、印刷中) | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Rich Descriptions and Simple Explanations in Morphosyntax and Language Acquisition (Oxford University Press) | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 41 |
| 2. 論文標題 On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 The Linguistic Review | 6. 最初と最後の頁 59-84 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/tlr-2024-2003 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 41 |
| 2. 論文標題 On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 The Linguistic Review | 6. 最初と最後の頁 59-84 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/tlr-2024-2003 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Wh-Phrases as Genuine Focus Operators (校正済、印刷中) | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Rich Descriptions and Simple Explanations in Morphosyntax and Language Acquisition (Oxford University Press) | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Phrase Structure and Movement in Japanese | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Oxford Research Encyclopedia of Linguistics | 6. 最初と最後の頁 1-45 (pdf版) |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/acrefore/9780199384655.013.286 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Mamoru Saito | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 Two Notes on Copy Formation | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Nanzan Linguistics | 6. 最初と最後の頁 157-178 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 齋藤 衛 | 4. 巻 45 |
| 2. 論文標題 原理群による規則の説明から原理群の説明へーラベル付け理論をめぐってー | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Energeia | 6. 最初と最後の頁 15-37 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Saito, Mamoru | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 On the Causative Paradoxes: Derivations and Transfer Domains | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Nanzan Linguistics | 6. 最初と最後の頁 25-44 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 6件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 Null Arguments in EA Languages Revisited: Ellipsis or Pronouns |
| 3. 学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 17 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 In Defense of Covert Wh-movement |
| 3. 学会等名 MayFest 2023 (University of Maryland) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 Evidence for Minimal Yield and Form Copy from East Asian Languages |
| 3. 学会等名 Workshop on Workspace, MERGE, and Labeling (Online, 韓国 Modern Grammar Society) (招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 In Defense of Covert Wh-movement (after 40 years) |
| 3. 学会等名 MayFest 2024 (University of Maryland) (招待講演) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 Null Arguments in EA Languages Revisited: Ellipsis or Pronouns |
| 3. 学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 17 (National University of Mongolia) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Language |
| 3. 学会等名 GLOW in Asia XIII Online Special (香港中文大学) (ワークショップ基調講演) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 斎藤 衛 |
| 2. 発表標題 Theta規準再考 - コピー形成操作とラベル付け理論をふまえて |
| 3. 学会等名 日本英語学会第40回大会 (オンライン) (特別講演) (招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 Weak Heads in Labeling: Why J/K-type Scrambling is Allowed |
| 3. 学会等名 Syracuse/Cornell Workshop on Scrambling (Online) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Mamoru Saito |
| 2. 発表標題 Evidence for Minimal Yield and Form Copy from East Asian Languages |
| 3. 学会等名 Workshop on Workspace, MERGE, and Labeling (Online, 韓国Modern Grammar Society) (招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 斎藤 衛 |
| 2. 発表標題 転送の単位と言語間変異—移動と束縛における局所性をめぐって |
| 3. 学会等名 ドイツ文法理論研究会2019年春の大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Saito, Mamoru |
| 2. 発表標題 Variation in Transfer Domains and the Presence/Absence of Phi-feature Agreement |
| 3. 学会等名 The 12th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 斎藤 衛、高橋大厚、瀧田健介、高橋真彦、村杉恵子他13名 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 開拓社 | 5. 総ページ数 295 |
| 3. 書名 日本語研究から生成文法理論へ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

ノートルダム清心女子大学HP 研究者紹介
<https://www.acoffice.jp/ndsuhp/KgApp?resId=S000151>
 南山大学言語学研究センターHP 研究者紹介
<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/staff/index.html>

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | |
|---------|---------------------------|------------------------|--|
| 米国 | University of Connecticut | University of Maryland | |